

平成30年度資源評価報告書(ダイジェスト版)

[Top](#) > [資源評価](#) > [平成30年度資源評価](#) > ダイジェスト版

標準和名 キチジ

学名 *Sebastolobus macrochir*

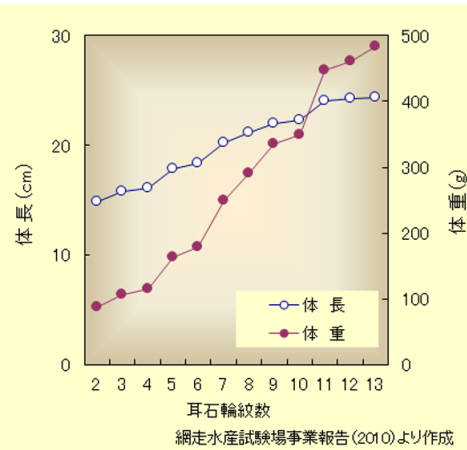
系群名 オホーツク海系群

担当水研 北海道区水産研究所



生物学的特性

寿命：太平洋北部では20歳程度だが、本系群では不明
成熟開始年齢：不明
産卵期・産卵場：産卵盛期は4～5月、産卵場は不明
食性：魚類、クモヒトデ類など
捕食者：不明

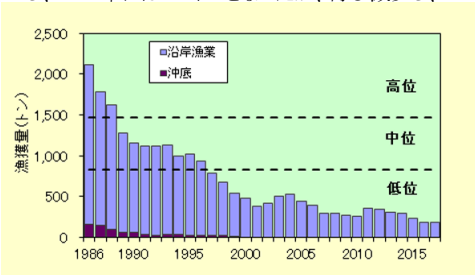


漁業の特徴

はえ縄、刺網(併せて沿岸漁業)と沖合底びき網漁業(沖底)により周年漁獲される。1996年以降、オホーツク海において、ロシア漁船がキチジを漁獲しているとみられるが、漁獲実態は不明である。

漁獲の動向

オホーツク海と根室海峡における沖底と沿岸漁業の漁獲量は、長期的にみて減少傾向にある。特に、沖底は近年ほとんど漁獲していない。1986年に2,000トンを超えていた漁獲量は、2001年には375トンまで減少した。その後増加し、2004年には533トンとなったが、再び減少し、2017年は184トンであった。ロシアの漁獲量は不明である。

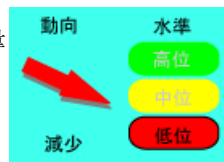
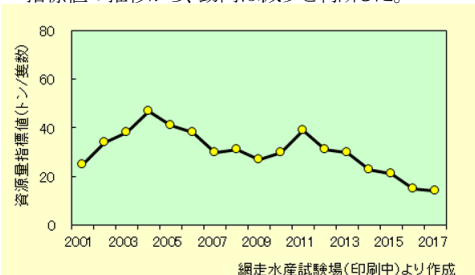


資源評価法

長期間のデータがそろっている1986～2017年の総漁獲量の推移に基づき、資源水準を判断した。オホーツク海におけるはえ縄漁業の2001～2017年の操業隻数は3～4隻と安定していることから、はえ縄漁業の操業隻数あたりの漁獲量(CPUE)を資源量指標値として資源動向を判断した。

資源状態

過去32年間(1986～2017年)の漁獲量の最高値～最低値を3等分し、上から高位、中位、低位とした。2017年の資源水準は低位、また、最近5年間(2013～2017年)の資源量指標値の推移から、動向は減少と判断した。



管理方策

資源水準・動向は低位・減少のため、資源水準、および資源量指標値に合わせて漁獲を行うことを管理方策として、2019年ABCを算定した。本資源の資源状態は、極めて低い水準にある。資源状態の改善においては、未成魚が成

熟するまで獲り残し、親魚を増加させることが、有効と期待される。資源評価の精度向上を図る上で、ロシア船の漁獲実態の把握に努める必要がある。

管理基準	Target／Limit	2019年ABC (トン)	漁獲割合 (%)	F値 (現状のF値からの増減%)
0.7・Cave3-yr・0.79	Target	90	－	－
	Limit	110	－	－

- ABC算定規則2-1)により、 $ABC_{limit} = \delta_1 \cdot Ct \cdot \gamma_1$ で計算した
- Limitは、管理基準の下で許容される最大レベルの漁獲量、Targetは、資源変動の可能性やデータ誤差に起因する評価の不確実性を考慮し、管理基準の下でより安定的な資源の回復が期待される漁獲量
- $ABC_{target} = \alpha \cdot ABC_{limit}$ とし、係数 α は標準値0.8
- δ_1 は0.7(低位水準における推奨値)
- $\gamma_1(0.79)$ は、 $\gamma_1 = 1 + k(b/I)$ で計算した。kは標準値の1.0とし、b(-3.50)とl(16.67)は資源量指標値の傾きと平均値(直近3年間(2015～2017年))である
- Cave3-yrは、2015～2017年の平均漁獲量
- 2019年ABCは、10トン未満を四捨五入して表示

資源評価のまとめ

- 資源水準は低位、動向は減少

管理方策のまとめ

- 資源水準、および資源量指標値に合わせて漁獲を行うことを管理方策として2019年ABCを算定した
- 未成魚が成熟するまで獲り残し、親魚を増加させることが、資源状態の改善に有効と期待される

執筆者：山下紀生・岡本 俊・濱津友紀

資源評価は毎年更新されます。